

書評

鬼子の体臭を嗅ぐ

—— 中村 誠 『金子光晴 〈戦争〉と 〈生〉の詩学』

坪井 秀人

金子光晴という詩人は、その晩年に重なる時代を同時代者として知る者にとつては、孫娘を猫かわいがりした詩を書いたりもするが、基本的には自由で洒脱な日常を生きるエロ爺さんの文人という実像が強烈に記憶に刻まれており、少なくとも私などは作家の実像から解き放たれてテキストに接することは困難だという理解をしてきた。金子は詩だけではなく、紀行文や評論・エッセイなどもたくさん残しており、それらはいずれも無類に面白くて、ほとんど外れがない逸品なのだが、それもまた作者の毒の強い体臭に拠るところ少なくない。

私の場合、本格的には、『鮫』他に所収の代表作を別とすれば、増補新版の『若葉のうた』が出た頃に購入して読み、それから遡るように『I・L』を求めたのが最初の接点だったのだが、『若葉のうた』の《孫ぼけ》の詩を、かつての反骨の〈抵抗詩人〉の像や巷間に囁かれるエロ爺さんのイメージとどのように接続すべきか、はかりか

ねていたことを思い出す。金子が訳したアルチュール・ランボーの鮮度の高い訳詩に打ちのめされたことも忘れがたい。ランボーの翻訳では、何といっても若き日の小林秀雄によるものが岩波文庫にも入って名声を確保しているのだが、金子による訳詩は小林のそれに劣らないどころか、詩篇としての生命力において小林訳を凌駕しているのではと思わせる。ランボーと同様、地球の半球を放浪した詩人の生が、ここでも訳文に憑依しているからだろうか。

戦時期を〈抵抗詩人〉として生き抜いたという、ほとんど神話化された詩人像に収斂されがちな金子光晴だったが、『マレー蘭印紀行』などに結実する東南アジア体験やヨーロッパ体験、それに後半生の破天荒な私生活等々をあわせて、この詩人の生じたいが一つの強固な〈作品〉であった。金子が一九七五年に亡くなって以後も、後発する戦後詩人たちの活躍は続いたけれども、田村隆

一や鮎川信夫ら『荒地』の詩人たちもいつか世を去って、ひっそりと終焉した（戦後詩）を今ふりかえってみるならば、書いたもののみならず、書く身体、書く生そのものを（作品）として差し出した、反テクスト論的な金子の作者像は、（戦後詩）のなまなましい生と一体のものであったことに、あらためて思い至るのである。

恐らく荒地派の詩人たちを最後に、戦後の生と等身大の戦後詩人の時代も終わったのだが（鮎川は一九八六年に、田村は一九九八年に亡くなった）、彼らの最期にはすでに金子のような強烈な相貌も体臭も稀薄になっていた（鮎川などは意志的にそうあることを望んだ）。読者の中で（作品）と化した作家は、彼／彼女が書いた作品を自立させたがらない（と読者の目には映る）。金子光晴の作品を時代の息づかいや倫理を解除したところで読み解くことを難しくさせてきた所以である。

詩人の生前から首藤基澄が単行の研究書を上梓していたし、米倉巖・中野孝次らがそれに続いて、金子光晴研究の基礎が築かれていたとはいえ、（抵抗詩人）の神話に方向づけられてか、その全体像を探求するには至っていなかったのが実情であった。一九八六年には「金子光晴の会」が発足して、個人作家研究誌というべき機関誌『こがね蟲』が刊行され、評者も毎号欠かさず購読して

いたが、それはいまだ右に指摘したような作家の体臭から自由になったとはいえない段階にあった。『こがね蟲』も十年続いたところで途絶えている。詩人の没年から刊行を開始した中央公論社の『金子光晴全集』は、金子の仕事の全貌を知らしめる上で重要な役割を果たしてきたし、司修による昆虫のアイコンをあしらった装丁が心憎い、美しい全集ではあるが、この出版社の個人全集に共通することであるとはいえ、テクスト・クリティクがまったくなされていない。徹頭徹尾、金子光晴は反テクストを生前も没後にも、実践し続けている、とでも言いたくなる状況が続いていたのである。

こうした研究体制に対して一つ波紋が投じられたのが、櫻本富雄らによるきびしい（抵抗詩人）批判である。戦争詩（愛国詩）を書いた近代詩人たちを審判の場に引張り出す櫻本の情熱は、戦時期日本の翼賛的な文学体制に殆どが与した中で、貴重な（例外）としての聖性を誇示してきた（抵抗詩人）金子光晴に対しても容赦なく批判の矢を向けた。櫻本に応ずるかたちで柴谷篤弘らが戦争詩の文脈の中で金子の戦時期の仕事を再評価する議論の場を作ったこともあり、首肯するにせよ批判するにせよ、櫻本の批判は、金子光晴を歴史の再審の場に引きずり出したことにおいて功あったと見なければならぬ。

ろう。

久々の、そしてほとんど最初の本格的な金子光晴研究の単行書と言って過言ではない、中村誠『金子光晴〈戦争〉と〈生〉の詩学』も、櫻本や柴谷らの議論の熱度さめやらぬ中から生まれてきたと位置づけることができ。中村の批評的なポジショナリティは、この本の副題をなす〈戦争〉〈生〉〈詩学〉という三つのキイワードによって、何よりも的確に説明されうるものであろう。それは、私が冒頭から述べ来たったような、詩人の体臭、いわゆる作家神話の光源からもたらされる金子作品の〈反テクスト〉的な受容のくびきと、そこから逃れることの困難さを、深く、周到に意識されたところから選ばれた批評の身構えであったと見なされよう。

本書の概略を示すため章立てを以下に掲げる。

はじめに

【I部】第1章 『こがね蟲』から『鮫』へ／第2章 〈連合〉への夢／第3章 『エムデン最期の日』を読む／第4章 「鮫」から「マライの健ちゃん」へ／第5章 『鬼の児の唄』にみる「亡鬼」の叫び

【II部】第6章 『人間の悲劇』の構想から成立へ／第7章 『人間の悲劇』における世界観と積極的ニヒ

リズム／第8章 『I.L』における〈老年の生〉／

9章 未完詩集『泥の本』における〈戦争〉と〈生〉

／第10章 「国民詩人」としての金子光晴／第11章

〔^{レビトアラ}鱗翅目〕の詩学／第12章 〈骨〉の詩学／第13章 〈腐

臭〉〈腐爛〉への偏執

金子光晴の研究動向／金子光晴略年譜／初出一覧／あとがき／索引

みられるように本書は三部によって構成され、第I部は著者いうところの《戦時下詩文論》といった内容の論考が収められ、『鮫』から『鬼の児の唄』あたりまでの詩集が取り上げられ、辻潤の翻訳で知られるマックス・シュテイルナーとの比較研究など、金子の思想的な基底に対する考察も展開される。第II部は《戦後詩論》と呼ぶ性格の論考を収め、『人間の悲劇』や『I.L』、それに未完詩集『泥の本』について論究されている。第III部では中原中也や大手拓次といった他の近代詩人との比較研究の論考が収められ、〈生と死〉あるいは臭いに関わる主題を縦軸とする考察が行われている。

大ざっぱに言えば、第I部では〈戦争〉が、第II部と第III部では〈生〉が問題化され、それぞれに〈生〉と〈戦争〉が時々交差しながら、その全体を〈詩学〉的な方

法意識によつて統一するというのが、著者の本書における批評的戦略であると見ることができらう。

特にここでは本書の〈戦争〉という問題系について見とおきたいと思う。戦時下にあつた金子が一人息子の召集を回避するためにいろいろな努力をして、家族で山中湖畔に疎開したということが、〈抵抗詩人〉神話の枠内で必ずといつてよいほど取り上げられるが、そのことをやはり、神話ではなく一つの〈思想〉として（思想的な財産として）受けとめようとする姿勢が、著者にはある。核心となる箇所を引用しておこう。『蛾』に収録された「富士」や「三点——山中湖畔に戦争を逃れて」について述べられたくだりである。

《ここ》では、日本国民の命を奪うものとしてへの戦争批判ではなく、あくまで、作者の属する「三人」家族の平和な営みを消さないことを希求するという点において戦争が忌避されている。他人の家族をも含めた日本人の家族一般に関して幸福を求めるといふ発想ではなく、自分が属しているその個別の家族の幸福が念願されるというところに金子の面目躍如たるものがある。結果として、それは戦争に反対するという思想にも繋がるのだが、同じ反戦を説くにしても、国民全体の生命の安全を祈り、国家の将来を憂うというのではないところにこれらの詩

の特徴はある。金子は戦後、反戦抵抗詩人として評価を高めるが、これらの詩から見えてくるのは反戦という思想であるよりも、一億一丸の国民という迷妄から逃れ、「私」や「私の家族」という場に立脚しているという、そのエゴイスティックなまでの思想の出発点である。他の詩人達が、国家に所属する国民の一人としてしか自己を捉えられなかつたことと比較するとき、その特異性は一層明瞭になる。《四三頁》

戦後、戦時下にあるいは戦争直後に書かれた文学作品を集めた、反戦や抵抗やヒューマニズムの名を冠した作品集がいくつか刊行された。そのいちいちを点検することはここでは出来ないし、それらを短絡に政治的便乗主義として一括りにすることは慎まなければならぬ。むしろ、とりわけ一九五〇年代という日本の近現代史の中でも特異な時代の息吹を伝える遺産として、それらを積極的に評価しなければならぬと私は考えている。

その上で、しかしながら、それらが過去の言説を歴史的に再配置することで歴史そのものを書きかえてしまうという陥穽を孕んでいることについては、やはり批判的に見ておく必要がある。こうした戦時下の〈反戦〉〈抵抗〉に関する記述の問題（それは文学の戦争責任問題と補充し合う関係にある）と、著者が金子の〈反戦〉〈抵抗〉

を右のように捉える姿勢とは、実は深くかわりあうように思われるからだ。本書がすぐれているのは、〈抵抗〉や戦争責任をめぐる裁断的な議論の積み重ね（それ自体が無価値であったわけではけつしてないが）の問題を自覚するところに論究の前提があり、その桎梏から自由になろうとする努力がそこかしこになされているところにある。

こころみに手許にある花田清輝・佐々木基一・杉浦明平共編『日本抵抗文学選』（一九五五、三一書房）というアンソロジーを繕いてみる。この作品集には小説・ルポルタージュ・シナリオ・評論・エッセイという散文が中心に収められ、詩の収録はほんのわずかなのだが、詩の項に金子の「鬼の児放浪——鬼の児卵を割つて五十年」が一篇採られている。

鬼の児はいま、ひんまがつた
じぶんの骨を抱きしめて泣く。

一本の骨は折れ、
一本の角は笛のやうに
天心を指して嘯く。

「鬼の児は俺ぢやない

おまへたちだぞ」（作品集では新仮名遣いに改められている）

テクストのこの末尾においては、異形の存在である鬼子の疎外感が読者一般に投射し返され、一挙に批評的な相貌を帯びる。だが、これを戦争に対する抵抗の表現と、はたしてわだかまりなく言うのだろうか。この『日本抵抗文学選』には例えば石川淳「曾呂利咄」、太宰治「十二月八日」、坂口安吾「ラムネ氏のこと」などの作品が載っているが、同様の懐疑が、やはり残る。太宰のこの短篇を反戦文学として読みうると、何かの論文で読んで哑然とした記憶がある。このような解釈は正を反と言い、反を正と言う符牒や極限的なアイロニーとして受け取らない限り、成り立たないからである。編者の一人、佐々木基一は同書の「解説」でこのような曖昧さを認めて、次のように述べる。

《戦争中の抵抗といつても、文学者にどれほど抵抗があつたのか、という声がわたしの内心でささやく。これがすなわち、心の弱い部分である。敗戦直後に、戦争責任や抵抗が論じられた際、論者は大抵この心の弱い部分に自ら足をさらわれていた。口先だけは勇ましくても、内心では、いくらか面はゆく感じていた。（中略）したがって、戦争責任の追求も、抵抗の実態の検討も、どこか中途半端で、結局ウヤムヤのうちに立消えてしまわねばならなかつた。》（四二二頁）

戦争経験世代に固有の良心というか誠実さが顕れた文面とも呼べば呼びうる。だが、佐々木がこの箇所の後で言う、戦時下の態度として不可避であった〈迂回〉や〈逃避〉が単なる迂回や逃避で終われば、それは〈抵抗〉にはならないが、《そのなかで何ものかを積極的に築いていった作者と作品》を《今日の文学を築く上での積極的要素として再検討する》ことで、それは戦時下における〈抵抗〉になりうる、という考えは、いわゆる〈芸術的抵抗〉と同様の詭弁に聞こえてしまう。《心の弱い部分》で戦争責任や抵抗を受けとめるのではなく、未来に向けた建設的な教えをそこから汲み取らなければならない、という、さわめて共同的な論理は、それ自体が国民的倫理（一億総懺悔）の裏面としての）に繋がるものではない。なかったのではないか。佐々木らを、内心の《心の弱い部分》を克服して〈抵抗〉へと駆り立てていた情熱は、その後の戦後の数十年間、ますます冷却され、《中途半端で、……ウヤマヤのうちに立消えて》しまったと言わざるを得ないのである。

戦後六十四年を経た現在においても、抵抗と戦争責任が二つながらに論じられるようには、なお至っていない。けれども、その萌芽は一九九〇年代後半から少しずつ見出されてきたとも言える。金子光晴の《反戦とい

う思想であるよりも、一億一丸の国民という迷妄から逃れ、「私」や「私の家族」という場に立脚しているという、そのエゴイステイックなまでの思想》をたぐり寄せようとする中村誠の仕事もまた、その可能性の深淵に対して果敢にダイヴした試みだといえるだろう。

《日本国民の命を奪うものとしてへの戦争批判》あるいは《国民全体の生命の安全を祈り、国家の将来を憂う》という反戦意識に連なるだけでは、佐々木らがとらえられた内心の《心の弱い部分》からいつまでも抜け出すことは出来ない。そのように金子光晴という作家の生とその作品の生は示していると見なければならぬ。

《鬼の尻》ならぬ異形なるもの、少数なるものが、知的なレヴェルでどれほど尊重され、時に聖化されようとも、新自由主義の二重基準的なシステムのもとでは、少数者の声はテロリストと同じ磁場へと押し込められ、危険視され封殺されてしまう。その意味において、佐々木が花田清輝や杉浦明平らとこうして〈抵抗〉を過去に探し出し、それを現在を起点にして未来へと反転させようとした情熱は、今日のあやうい状況の中で、示唆深い。

中村が論証したように、シユティルナーやその訳者たる辻潤と〈連合〉する金子の姿勢は、《少数者》の位置から、絶えず社会に対して更新を求めていく》ものであつ

たとするならば、それは端的にいつて、〈アナキズムは現代において可能か〉という問いを内包するものだろう。国民的なるものを国民的なるものを再編することで撃つことは、現実政治の局面において一定の有効性を持つ。けれども、その再編は国民的なるものを何であれ反復したものでしかないことも、また事実なのだ。〈アナキズムは現代において可能か〉。この問いは今日において、まさしく有効である。

こうした議論において中村の著作が強い説得力を持つのは、戦時期および戦争直後の金子の営為のみならず、晩年の詩人の志向からも、同様の問題性を引きだそうとしていくからである。本書ではそこに〈戦争〉の問題系と交差するかたちで、特にⅡ部において〈生〉の問題系がつよく描き出されることになっている。《……晩年の金子は、「生」が一回限りのものであるが故に残り少なくなつた自身の「生」を惜しみ、その「生」に強く拘つた》、そしてその晩年の志向は若き日における《代替不能の自己》すなわち自身の〈唯一性〉に対する志向と折り重なっていると、中村はするどく指摘する（二七三―二七四頁）。未完詩集『泥の本』を論じた第9章の論考は、ベトナム反戦に対する金子の微妙な位置の取り方を見事な分析で論じている。賞賛でも裁断的否定でもない、あ

るがままの金子のポジショナリティを復元しようとする記述は貴重であるといわなければならない。

付言するに、幾つかの注釈の中にも本書は発見が多い。このベトナム反戦運動との関わりにおいても、ベ平連の側に位置する若者たちが金子を読んでいたという証言を集めているところなど、スリリングともいえる面白さを含んでいる。

先に『金子光晴全集』の司修の装丁のことに触れたが、本書の装丁もなかなか美しいことを指摘しておかねばならない。表紙から扉、各部の合間に挟まれた峠彩三氏の撮影したスナップ写真に佇立する、金子の姿の、なんという存在のたしかさ。そこで思い至るのが、エロであろうがなかるうが、こんな凄みのあるお爺さん、最近とんと見かけないことだ。

禿げた頭、額にぎざまれた皺、垂れ下がる白髪の眉毛、そのどれもが、スタイリッシュなどという浮薄な表現とはまったく別物の、あるがままの〈唯一者〉の顔を構成している。中村の種々の批評し論証する言葉がこれらの肖像に寄り添い、何にもまさるそれらのキャプションになり得ていることを、読者は実感するだろう。金子光晴はまさにその存在が〈作品〉であった、と。

鬼子の体臭を嗅ぎ取ること。それはもちろん単純な作

家論への回帰などではない。それによって次の世代への受け渡しが可能で金子のテクストに対する批評と研究のフォーラムも用意されるのだと、本書は論じているように思われるのである。

二〇〇九年四月三〇日、笠間書院、四六判、三九一頁、
二、八〇〇円＋税

（つばい・ひでと／名古屋大学）